

佐世保市平成 29 年度赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業実施に関する報告書

門田理世（西南学院大学） 沖本悠生（西南学院大学大学院生） 渡邊由恵（久留米信愛女学院短期大学）
寺地亜衣子（西南学院大学大学院生） 佐世保市幼児教育センター

1. はじめに

佐世保市幼児教育センターでは、乳幼児の健全な育成を目指し、幼児教育の充実向上のための研修や子育て支援を行っている。その一つに、平成 27 年度から幼児教育センターと小学校が協同して実施している「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」があり、市内の公立小学校に通う児童が、佐世保市幼児教育センター等を利用する保護者とその赤ちゃんとのふれあい交流を行っている。佐世保市では小学校等において様々な形でいのちについて考える授業に取り組む「いのちを見つめる月間」が設けられており、「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」はこの月間中に実施された。

少子化対応推進事業の一環として実施されている本事業には、保護者と児童の双方に対する目的がある。保護者には、①親としての喜びを感じることに、②自分の子育てを振り返ることに、③自分の子どもの成長や将来をイメージすることに、④小学生とかかわることで、保護者自身が地域の一員であることを意識する機会となること等を期待している。他方、児童には、①実際に赤ちゃんふれあう中でいのちの温かみを知ること、②赤ちゃんの保護者と話すことで親の思いなどを知ること、そして③自分が生きていることの意味、いのちの大切さや生命の不思議さを感じ、「いのち」について考える重要な機会となることをねらっている。本事業は、昨年度からの継続事業であるが、今年度はその意義を検証するため調査アンケートを作成し、事業の前後に保護者と児童を対象にアンケート調査を行った。本報告書では、その分析結果を報告する。

2. 方法

【赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業内容】

対象：主に幼児教育センターを利用する保護者とその赤ちゃん（おおむね 3 か月～12 か月）、市内の公立小学校に通う児童 5・6 年生

内容：事業参加に応募した親子及び児童が、小学校または幼児教育センターで約 45 分間のふれあい交流を行う。児童はふれあい事業の事前・事後にそれぞれ 1 時間ずつ授業を受ける。

表 1 調査対象および調査期間

日時	場所	参加者（親子）	参加者（児童）
平成 29 年 6 月 12 日（月） 10：30～11：15	幼児教育センター	保護者：9 名 赤ちゃん：10 名	金比良小（5 年 1 組：19 名）
平成 29 年 6 月 15 日（木） 10：30～11：15	佐世保市立木風小学校（体育館）	保護者：15 名 赤ちゃん：15 名	木風小（6 年 1 組：31 名）
平成 29 年 6 月 22 日（木） 10：40～11：25	佐世保市立白南風小学校（体育館）	保護者：12 名 赤ちゃん：12 名	白南風小（5 年 1 組：22 名）
平成 29 年 6 月 23 日（金） 10：40～11：25	佐世保市立白南風小学校（体育館）	保護者：11 名 赤ちゃん：11 名	白南風小（5 年 2 組：24 名）
平成 29 年 6 月 27 日（火） 10：30～11：15	幼児教育センター	保護者：13 名 赤ちゃん：13 名	潮見小（6 年 1 組・2 組：36 名）

【アンケート内容の概要】

	保護者		児童	
事前	問 1	年齢・性別・お子さんの月齢・出生順位	問 1	年齢・性別・兄弟の数・自分が兄弟の何番目か
	問 2	事業に参加しようと思った動機	問 2	これまでの赤ちゃんとの触れ合い経験の有無、回数、触れ合った対象
	問 3	事業に参加した回数	問 3	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること（自由記述回答）
	問 4	平素、小学生と触れ合う機会の有無、触れ合う場面	問 4	赤ちゃんに触れ合う中でしたいこと（自由記述回答）
	問 5	小学生に対するイメージ（自由記述回答）	問 5	赤ちゃんの保護者に聞いてみたいこと（自由記述回答）
	問 6	子育てに対する不安や気になることの有無、その内容 相談する相手の有無、相談する相手		
事後	問 1	事業に参加した回数	問 1	事業に参加して感じたこと
	問 2	事業に参加して感じたこと	問 2	赤ちゃんに触れ合った内容（自由記述回答）
	問 3	保護者が事業に参加したよかったか、その理由	問 3	そのときの気持ち（自由記述回答）
	問 4	赤ちゃんが事業に参加してよかったか、その理由	問 4	赤ちゃんに触れ合っよかったか、その理由
	問 5	小学生のイメージの変化の有無、その理由	問 5	赤ちゃんの保護者と話したか、その内容
	問 6	小学生が赤ちゃんに触れ合うことがよかったか、その理由	問 6	赤ちゃんの保護者と話してよかったか、その理由

問7	今後この事業に参加したいか、その理由	問7	「赤ちゃん」と聞いて思い浮かべること（自由記述回答）
問8	事業に対する感想や意見（自由記述回答）		

【回答数】

親子 60 組(内、2 回参加者 16 組、双子 1 組)、児童 132 名(5 年生 65 名、6 年生 67 名)

【属性】

表 2 保護者の年齢

保護者の年齢	単位：人
20 歳代	10
30 歳代	43
40 歳代	7
50 歳代以上	0
無回答	0
合計	60

(※うち、父親 1 組含む。3 名無回答)

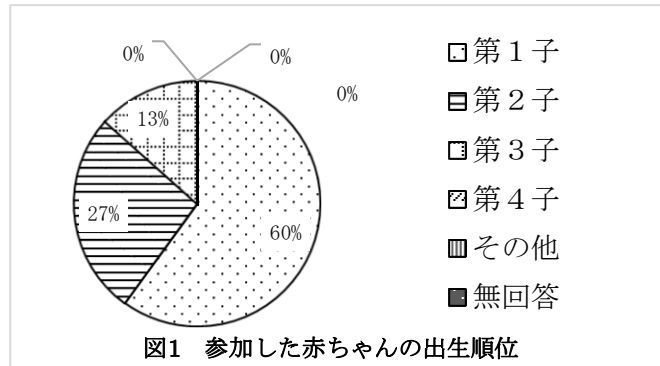
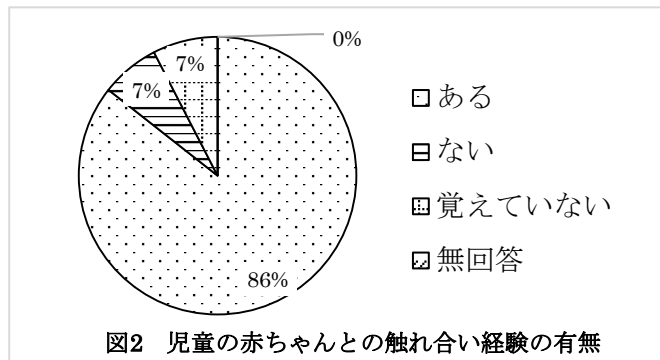


表 3 児童の兄弟の数

兄弟の数	単位：人
一人っ子	9
2 人兄弟	47
3 人兄弟	45
4 人兄弟	14
5 人兄弟	2
6 人兄弟	3
7 人兄弟	1
合計	139



3. 結果および考察

○子育て支援としての「赤ちゃんふれあい（いのちを育む）事業」

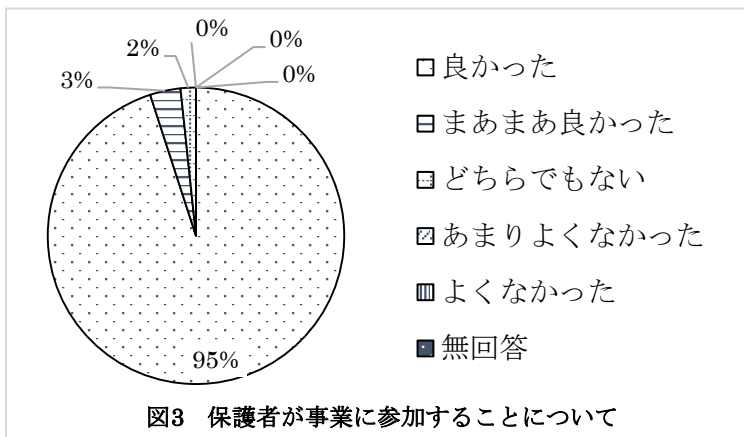


表 4 保護者の自由回答（理由）の分類

いのち、赤ちゃんの大切さを考える
他人と触れ合うことの楽しさを味わう
「子ども」に対する気づきを得る
自分（の子育て）についての振り返りを行う
小学生の役に立ちたいと思う
自身の子育てへの展望が開ける

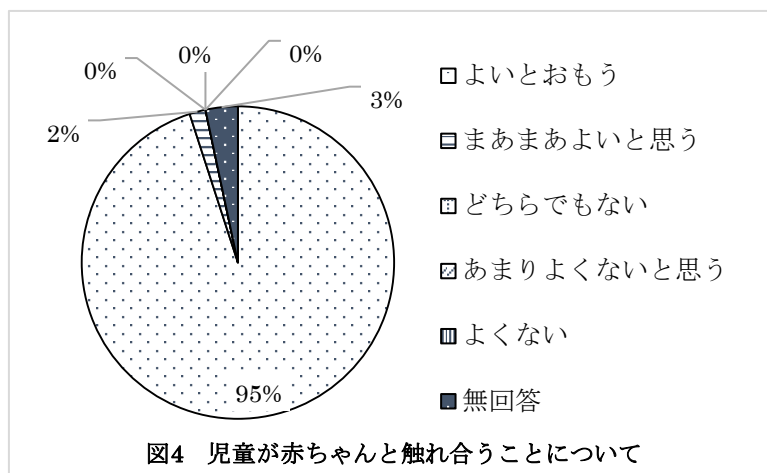
事後アンケートで保護者にこの事業に参加しての感想を尋ねたところ、参加者の 9 割が参加してよかったと感じていた（図 3）。その理由は「保護者自身

身がいい経験をした」「赤ちゃんがいい経験をした」「楽しかった」というものであり、この事業が参加した親子にとって良い経験を促すものであったことが伺える。さらに参加した保護者の回答内容（表 4）から、事業の目的である「自分の子育てを振り返る」ことや、「小学生とかかわることで自身が地域の一員であることを意識する」こと、「自分の子どもの成長や将来をイメージする」ことに即した回答が見られ、この事業は子育て支援の目的に対して一定の意義があったと言える。

また、「普段できない経験ができた」「たくさんの小学生とふれあえてよかった」という感想からは、保

護者は日頃小学生とかかわりが少ないことが推察されたが、本事業で小学生とふれあう機会を得たことで、「兄弟がほしいとおもった」「わが子の成長が楽しみになった」という保護者自身の子育てへの展望にもつながったと考えられる。加えて、「ひととのふれあいがいいから参加してよかった」「ほかの赤ちゃんともふれあえてよかった」という感想からは、保護者の社会とのかかわりの希薄さが浮き彫りにされ、佐世保市における子育て支援事業の必要性を明示したとともに、本事業及び佐世保市幼児教育センターの子育て支援事業が保護者に社会とのつながりをもたらす一助となっていることが伺えた。

○「いのちの大切さ」を児童に伝えたいと考える保護者

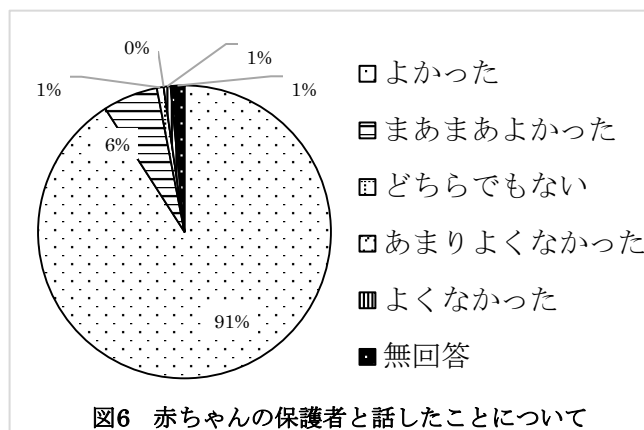
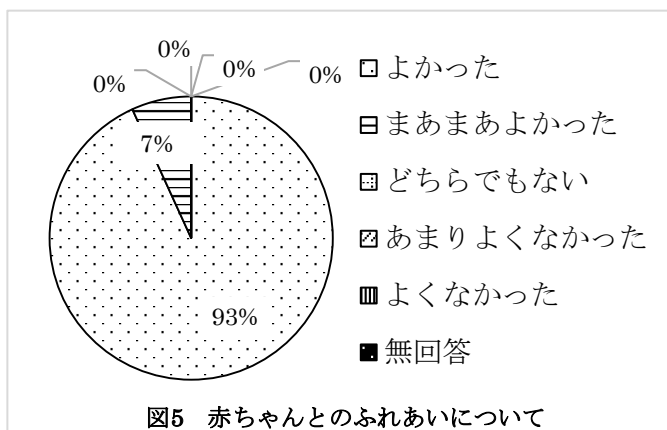


参加した保護者の9割が、児童と赤ちゃんとのふれあいを肯定的に捉えている（図4）。その理由として、児童が赤ちゃんを抱くことで赤ちゃんの重たさや肌の柔らかさなどを実感し、かかわり方を知る機会になること、赤ちゃんとのふれあいによって児童がいのちの大切さを考えることができることなどが挙げられた。

保護者は明確な参加動機を持っており、その動機は「子どもにとって、い

い経験になりそうだから」「子どもにいろいろな人とふれあってほしいから」という我が子に対することが中心であった。しかし、参加後に「自分自身を大切に思う気持ちをしっかり持って欲しい」や「命の大切さ、愛されているということを感じてほしい」など、我が子だけではない児童にも意識が向いている回答が見られた。これは本事業が、保護者に我が子（赤ちゃん）ではない児童に対しても「いのちを大切にしてほしい」と願う意識を喚起したと推察される。

○赤ちゃんに触れ合うことで分かる「いのちの大切さ」



児童に赤ちゃんともふれあって良かったか尋ねたところ、9割の児童が「よかった」と回答していた（図5）。その理由として、赤ちゃんにふれることで赤ちゃんの気持ちを理解し、赤ちゃんのことを知る機会になったこと、自分の幼い頃を思い出し振り返る機会になったことが挙げられた。さらに、実際に赤ちゃんともふれあい「温かい気持ちになった」という感想もあり、これは、実際に肌と肌を触れ合わせるだけでなく、場や空間を共有しながら赤ちゃんをよく観てよく聴く「ふれあい」を行ったからこそ実感できたことであると捉えられる。その中でも「命は大切だと分かった」という回答が2割あり、実際に赤ちゃんにもふれあったことで、いのちの大切さを感じていることが示された。

また、9割の児童が赤ちゃんの保護者と話して「よかった」と回答していた(図6)。赤ちゃんの保護者と話をしたことで、保護者の大変さが分かったり、「自分もこのように赤ちゃんを育てていく」と将来を見通したりする機会になったことが分かった。

○児童が持つ赤ちゃんに対するイメージの変容

事業の事前と事後に「“赤ちゃん”と聞いて、何を思いうかべますか？」と赤ちゃんへのイメージを尋ねる質問を行った。赤ちゃんとふれあう前は「なにもできない」「ちゃんとしゃべれない」「歩けない」「寝返りできない」などという赤ちゃんを未熟な存在として捉える表現があったが、赤ちゃんとのふれあい後は「意外とすばしっこい」「歩くのが早かった」「なんでもしたがる」など、自分がそれまで抱いていたイメージよりも赤ちゃんにはできることがたくさんあると理解する傾向が見られた。

また、赤ちゃんとのふれあう前は赤ちゃんの行動を「泣く」「笑う」といった単純な行為として捉えていたが、赤ちゃんと実際に触れ合ったことで、「ものをとられると泣く」や「お腹が減っているときに泣く」などと、赤ちゃんの「泣く」という感情表現には、因果関係があるということに気づいたと考えられる回答が見られた。赤ちゃんが「泣く」行為には理由があると知ること、赤ちゃんが一方的に世話をされる受け身の存在ではなく、自分たちと同じように能動性を持つ存在であることに気づくことにもつながるのではないかと考えられる。

これらの変容は、実際に赤ちゃんの温かさや柔らかさを感じたり、懸命に動く姿を見たりするふれあいを行ったからであり、このふれあいを通して、赤ちゃんが自分と同じ命(存在)であることを実感していると推察される。事前の調査であまり見られなかった、「大切」「かけがえがない」などの、本事業での目的である「いのちの大切さ」に迫る直接的な言葉を引き出すに至った。

上記の結果は、児童が赤ちゃんという存在に意識的に向き合い触れ合ったことによって認知が変容した過程を示すもので、このふれあい事業の大きな成果の一つと言える。

4. まとめ

- ・保護者は児童とふれあう中で、親としての喜びを感じ、子育てへの自信につながる機会となっている。
- ・児童は赤ちゃんとのふれあう中で、「いのちの大切さ」を感じている。

以上のことから、本事業は保護者にとっては子育て支援としての役割を持つこと、児童にとってはいのちの大切さを感じる一助となることが示唆された。

5. 本事業における今後の課題

以上の分析結果より、保護者・児童双方に本事業実施には一定の意義が認められたが、同時に更なる事業の効果向上のために、以下の観点を持って継続事業を行うことが望まれる。

(1) 同じ対象の保護者・児童に、単年度内で複数回ふれあい体験を実施し、1度の体験で見られた保護者の子育ての捉え方の変容、児童のいのちの捉え方の変容が、複数回の体験を経て、さらにどのように変容していくのか。

(2) 同じ対象児童を追跡調査し、成長に伴ういのちへの捉え方の変容や持続性があるのか。

(3) 毎年、1歳未満の赤ちゃんとその保護者と5・6年生の児童を対象にふれあい体験を実施し、より多くの事例を分析することにより、事業の効果が明確になるのか。

(4) 幼児教育センター等を利用する保護者に毎年事業参加を促すことで、子育てに対する高揚感や意義が見出せるのか。

現段階での分析結果より、本事業に対して多角的な観点からの示唆が得られた。この中間報告結果を踏まえ、今後さらに分析を重ねた上で結果を精査し、事業の取り組みを検証していく必要がある。